知的な遅れを有する発達障害児における曖昧な指示対象の同定

○村上太郎¹・福田康² (非会員)

(1九州女子大学人間発達学科・2久留米市子ども未来部幼児教育研究所)

キーワード: 指示対象付与・発達障害・語用論

Reference assignment in intellectual disabled children with developmental disorder

Taro MURAKAMI¹ and Yasushi FUKUDA^{2,*}(¹Faculty of Humanities, Kyushu Women's Univ., ²Institute for Preschool education, Department of Child Future, City of Kurume)

Key Words: Reference Assignment, Developmental Disorder, Pragmatics

目 的

日常的なコミュニケーションを行う上で、他者の指示意図を解釈することは重要である。聞き手は文脈を参照して解釈を行う必要があり、特に、ある表現が何・誰を指しているのかを特定する語用論的処理は、指示対象付与と呼ばれる。近年、生後2年目の乳児は、他者との相互作用との経験(Saylor, Ganea, 2007; Ganea & Saylor, 2007)や他者の対象についての経験(Moll & Tomasello, 2007)などを手がかりに他者の指示意図を理解していることが報告されている。言語的コミュニケーションにおいては、直前のやりとりをふまえて曖昧性を解消する傾向は3歳から5歳にかけて高まることが示されている(Murakami & Hashiya, 2014)。

しかし、この曖昧性を解消する能力は、発達に課題を有する児においては定型発達群より低い傾向が示されており、さらには加齢に伴った向上がみられにくいことも示されている(村上, 2013; 村上・橋本, 2015)。知的な遅れのない発達障害が疑われる幼児を対象とした研究においても、3-4歳群と5-6歳群との間に指示対象付与課題(Murakami & Hashiya, 2014)の成績差はみられず、発話解釈における common ground(Clark, 1992)の成立のしにくさが要因として示唆された。

それでは、知的発達に遅れを有する発達障害児においてはどのような傾向がみられるのだろうか。本研究では、知的発達に遅れを有する児を対象に指示対象付与課題を実施し、課題成績や反応パターンを明らかにすることを目的とする。

方 法

調査参加者: F県K市における発達支援事業を利用している3-4歳児11名(平均月齢50.8ヶ月、 $SD=4.9$)、5-6歳児26名(平均月齢66.2ヶ月、 $SD=5.2$)。

実施課題:

- 1) 指示対象付与課題(Murakami & Hashiya, 2014)を実施。絵カードについて尋ねる属性(名称/色)を明示的に問う明示的発話(「これ何だ?/これ何色?」)と、曖昧に問う非明示的発話(「これは?」)を組み合わせた5問のイベントを1試行とし、1人当たり4試行を行った。i)明示的発話、ii)非明示的発話、iii)明示的発話(i)とは質問の属性(名称/色)を変える、iv)非明示的発話、v)非明示的発話の5問を連続して質問した。イベント得点として、Base-Assignment(i)∩ii)の正答数、Shift(i)∩iii)の正答数、Re-Assignment(iii)∩iv)の正答数、Follow-RA(iv)∩v)の正答数が算出された。
- 2) 誤信念課題としてサリー・アン課題(Wimmer & Perner, 1983)、スマーティ課題(Hogrefe, et al., 1986)を1試行ずつ実施し、ToM Score(0-2)として算出した。
- 3) 対人コミュニケーション質問紙(SCQ)を保護者に回答してもらった。

結 果

年齢差について、年齢群(2)×イベント得点(4)のANOVAを行ったところ、年齢の主効果はみられず、イベント得点の主効果が有意であった($p<.001$)。また、SCQの結果をもとにSCQスコア高群と低群に分け、SCQ(2)×イベント得点(4)のANOVAを行ったところ、SCQスコアの主効果はみられず、イベント得点の主効果が有意であった($p<.001$)。さらに ToM 課題に関して不通過群/通過群に分け、ToM(2)×イベント得点(4)のANOVAを行ったところ、ToMの主効果に有意傾向がみられ($p=.06$)、イベントの主効果は有意であった($p=.002$)。以上全ての分析において、Base-Assignment > Shift = Re-Assignment = Follow-RA という反応パターンがみられた。

また、実験の操作的定義として「適切」ではない反応を分析したところ、質問に対して名前・色の両方を答える反応が3-4歳群(45%)、5-6歳群(40%)の両方にみられた。

考 察

知的な遅れを有する発達障害児においては、指示対象付与課題の成績に関しては加齢の影響がみられず、知的な遅れがない発達障害児を対象とした先行研究(村上・橋本, 2015)の結果を支持した。しかし、課題成績の個人差の背景には自閉度の高低という要因は支持されず、本研究においても ToM 課題との関連を示唆する結果が示された。曖昧性を解消する能力の背景には、発達特性が直接関係しているというより、状況をふまえて他者の行動を予測する能力と発話解釈の際に先行するやりとりを遡及する能力との関連性が示唆された。

また、質問に対して名前・色の両方を答える反応がみられたことについては、このような反応は定型発達児ではほとんどみられておらず(Murakami & Hashiya, 2014)、知的な遅れのない発達障害児では20%程度の生起率である(村上・橋本, 2015)ことを鑑みると、質問が意図する指示対象をオンラインで処理(同定)する負荷がかかり、このような反応が生じやすいことが考えられる。これらの結果は、発達障害を有する児は、定型発達群とは異なる情報の重みづけを行っている可能性を示唆し、結果として common ground の成立のしにくさに繋がっているものと考えられる。

引用文献

- ・ Murakami, T. & Hashiya, K. (2014). Development of reference assignment in children: a direct comparison to the performance of cognitive shift. *Front. Psychol.* 5: 523. doi:10.3389/fpsyg.2014.00523
- ・ 村上太郎・橋本和秀 (2015)。「発達障害を有する幼児における曖昧な指示対象の同定—指示対象付与、誤信念課題との関連からみる語用論的コミュニケーション—」日本発達心理学会第26回大会、p4-57、東京大学